ホトトギス

十一月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別認可第六二七号
平成二十八年十一月一日発行（第百十四巻第十一号）

俳句随想〔三百五十三〕

汀　子

俳句大会が各地で催され、様々な賞があって表彰を受ける。そこに至る段階で選考会が開かれ、自ずから類句の問題が提起される。これは短詩型文学の宿命的な問題であって、その是非を問う判断は選者に一任されることになる。選考会では先ずその問題から始まるのである。類句か類句ではないかということは余り神経質になることはないと私は思う。盗作は言語道断であるが、類句は出来ないほうが不思議である。同じ見方、同じ考え、表現の類似、捉え方が同じであっても不思議はない。しかしその中から名句は生まれない。

新しい発見、新しい表現を望む余り、奇異な表現をする俳句を見ることがある。言葉は大事である。日本語の美しさを発見し、追求して行けばきっと素晴らしい作品に仕上がるであろう。人の作った俳句の表現を使うのは残念ではないか。と言っても発見した表現に特許権はない。使っていけない言葉はないが選者の判断でこれを類句とみなすかそうではないかと判断して責任を持つ。

○○の句は間もなく発表される○○賞に選んだ一句に類似している。という申出があったが、まるで発表の早いもの勝ちのようである。そのどちらも秀作ではないであろう。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十二年十一月一日　ロイヤル俳壇

その香濃きこと残菊のものならず
若き志士出でたる町の秋の行く
この町をやがて包まん神渡
行秋のホテルは季節先取りす
旅多き日々とて秋の逝かんとす

十一月七日　下萌句会

往路にはなかりし帰路の冬紅葉
山荘の炉開兼ねし案内状
立冬と構へし心崩しけり
霜除の仕上つてゐし旅帰り

十一月九日　大阪倶楽部

石蕗の花咲けば忌日でありしかな
何よりも家居の時間小六月
遅れゐて一気に冬の紅葉かな
やうやくに色ととのへり冬紅葉
凩に従ふほかはなかりけり

十一月九日　綿業倶楽部

落葉して仕尽すまでの日数かな
昨日とは違ふといへど冬日和
マロニエの落葉は朝の二三枚

十一月十一日　清交社

計画は早目早目に冬に入る
木の葉散り尽くすまで手を入れぬ庭
初霜の消えぬ大地を旅立ちぬ
綿虫も日向を恋うてゐる如く
初霜の消え快晴となりしかな
なほ梢を離れぬ木の葉二三枚

十一月十二日　工業倶楽部

帰り花日溜り移りをりにけり
真夜覚めて時雨るる音か風音か

十一月十三日　関西ホトトギス同人会

香を零す残菊が門つかさどる
名園といふ冬紅葉どまん中
名園や紅葉の遅速問ふまじく
菊作る苦労話も華やげる

十一月十四日　関西ホトトギス俳句大会

破蓮の静を揺らして鯉の動
百景の一つの桜紅葉これ

十一月十五日　アサヒカルチャー句会

時雨るるも晴るるも風の意のままに
冬帝に従ふ一歩踏み出しぬ
時雨雲そのまま通り過ぎにけり

十一月十六日　有恒倶楽部

紅葉散り惜しみ惜しみてどつと散り
冬耕の一人となりて暮れて来し
手を引かれたくなきもゐて七五三
はやぶさの快挙のその後小六月

十一月十六日　無名会

凩のをさまりてゐし朝かな
真夜覚めて冬の星座を見に出でし
柊の花の終りは知らぬまま
凩に脱ぎたる雲の遠ざかる
柊の葉に引つかけて花零す
凩の一掃したる空仰ぐ

十一月十七日　夏潮句会

黄落のはじまる庭となりにけり
日は西へ回りて光る冬黄葉
切干の匂ひこもるを好まざる
どうしても読めない熟語そぞろ寒
萩黄葉には見る距離のありにけり
はやぶさのその後のこと神の留守

零るるは山茶花盛りなりしこと
子育ての頃の遠しや七五三
山茶花の咲きぬいつからともなくて
湯沸かして米とぎてさて旅の冬
冬の雨ありしを知らず着陣す
今宵こそ冬の流星見たかりし

十一月二十一日　平成二十三年十一月十一日「ひろそ火」創刊

東の空の明るき松の内

十一月二十二日　「円虹」新年祝句

これよりの豊かな未来初明り

十一月二十二日　祝「さわらび七百五十号」

さわらびの天地豊かに冬ぬくし

十二月二十五日　「俳句王国」

芦屋市はわがまほろばよ燗熱く

十一月二十六日時　時雨会

朝の雨上つてをりぬ冬ぬくし
口切の座の一劃に畏まる
招かれて正座苦手の口切に
冬ぬくしとて結局は家居して

十一月二十七日　句会と講演の会

旅に得し景色のつづき朴落葉
忽ちといふは一夜の朴落葉
息白き旅立を苦にせぬ暮し
背を伸ばしさあ出掛けねば息白く
マロニエの落葉と比べ朴落葉

十一月三十日　依頼句「俳句」

音といふ音をひそめて初明り
浮雲の所在告げたる初明り
星消ゆる早さにありて初明り
松風の音なく渡る初明り
十本の松影正し初明り
若かりし日々は戻らず去年今年
この筆と決め書初の墨を磨る
初夢のつづきといふはなかりけり

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年十一月二日　刈谷市民俳句大会

朝寒の江戸温もりの三河かな
秋惜む色に整ふ卓の上
爽やかに案内されたる喫煙所

十一月三日　虚子記念文学館投句

畑さんも小林さんも冬支度

十一月四日　蕉心会

冷まじきこの仕事こなせるやろか
そぞろ寒旅から帰り又旅へ
冬支度とはこの仕事終へてより
冬近き空サイレンの吸ひ込めり
路地に入る冬近き音遠ざけて
万両に触るる佳人の掌
館に生れ息づくものに冬近し
桃吹いて君の俤引き寄せる

十一月五日　カトリック新聞選者吟

香部屋のドア開けるより冬支度

十一月五日　「あらうみ」諸家近詠出句

初茜百万石に染め上げて
御降も寺社を彩るものとして
加賀といふ恵方に縁深まれり
日本海の波音入れて初電話
漁始日本海の荒波に
ぬつと現れさうな小春でありにけり

十一月七日　野分会芦屋例会

朴落葉水漬く早さのありにけり
時雨忌の涙雨とはなりにけり
芭蕉忌や翁と呼ばれたくはなし

十一月八日　朝日カルチャー若草句会

冬耕の背ナに六甲颪かな
あつ危ないその袴著は一張羅
柿落葉水面は神のキャンバスに
日に星に色づけられし柿落葉
ハイヒール貫いてゐる柿落葉
母親の声甲高き七五三

十一月十一日　土筆会

星になるまで鷹舞うてをりにけり
鷹の空とは青々と艶々と
日本に鷹の空あり大地あり
大綿に二次元三次元の空
大綿の虚空現となりゆけり

十一月十二日　「ひろそ火」創刊祝句

若水を汲みて俳誌の未来祝ぐ

十一月十三、十四日　関西ホトトギス同人会、大会

葉に艶を貫うて石蕗の花明り
黄落を待ち侘びてゐる大地かな
幸村の魂を鎮めて山眠る
草虱取れぬ歯痒き五十肩
引導の鐘小春日を引つ張れり
黄落を掃いてしまはんでもええやん

十一月十五日　「円虹」新年号色紙揮毫

新しき一歩淑気に踏み出せり

十一月十六日　草木瓜会

祇園の灯点り叡山初時雨
千歳飴早々と食ぶ三歳児
初時雨止み東山現れ初むる

十一月十八日　登高会

冬晴を繋ぎて旅の続きをり
神の留守猫はつまらなさうに鳴き
冬日向雀ちよんちよん猫だらり
神の留守あなたはセコムしてますか
せつかちな商都の歩み落葉舞ふ
落葉掻ビル街の朝目覚めゆく

十一月二十、二十一日　囲む会

石蕗の黄になり切つてゐる羽の色
黄落を拒みて凛と一樹かな
小六月今年も少女めく君に
十本に百の彩り冬紅葉
笹鳴を誘ひ出したるホルンかな
冬晴に金管の音揃ひゆく

十一月二十二日　若水句会

浅漬や京にルーツを訪ねもし
冬耕や土の重さを諾ひて
浅漬の為の一本干し上る
晴れの国てふ山茶花の白さかな
浅漬を喜んでゐる歯茎かな
山茶花の一片散りてより暮るる

十一月二十四日　目黒学園句会

信濃路を白く塗り替へ一茶の忌
箒目の常に正され神の留守
小春日や今宵星空期持して
二三人口説きたくなる小六月
百獣の王小春日に沈没す

十一月二十七日　ホトトギス社句会

寒灯を消してＤＶＤ佳境

十一月二十八日　野分会東京例会

山気てふ重さに朴の落葉かな
芭蕉忌や俳句の未来憂ひもし
朴落葉拾ひ余生といふをふと
香を放ちつつ朴落葉ほほおちば
芭蕉忌や電波飛び交ふ俳句会

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

茅葺の里を縫ひゆく梅雨の傘　福知山　吉田節子
茅葺のくらしのちらと夏座敷　同　同
茅葺の戸毎の坂や青田風　同　同
筍や大きく貰ひ小さく煮る　龍ケ崎　今橋眞理子
窓開けておく額の花見ゆるほど　同　同
はんざきに時の流れの透き通る　芦屋　黒川悦子
卯の花に沿うて由良川にも沿うて　同　同
万緑に占領されて村百戸　渋川　木暮陶句郎
夜は蛍飛ぶを確信したる里　同　同
すぐ曇るカクテルグラス夏めける　福山　竹下陶子
夏めくや海の色なる雨雫　同　同
花婿は風花嫁はラベンダー　京都　安原葉
鴨の子の水に濡れざる羽毛持ち　同　同
俳諧の白寿の薔薇を抱けとて　同　同
諷詠の虚子の心と青き踏む　神戸　立村霜衣
蜘蛛の巣に先生だけがかかりけり　同　同
明易や旅にしあればしみじみと　橿原　稲岡長
邂逅の涼しその後の消息も　同　同
百合の香に風戸惑うてをりにけり　大阪　佐土井智津子
軋むほど色濃く百合の群れをりぬ　同　同
山百合に夕暮といふ匂ひあり　神戸　山田佳乃
夏の月赤く巨きく顔出しぬ　同　同
海の日の海軍カレー匂ふ街　香川　湯川雅
ナイターの虚空へ消えし打球かな　同　同
一人来て一人の田植見てをりぬ　熊本　岩岡中正
河骨や庫裏で電話が鳴つてゐる　同　同
風船や空へことづて一つづつ　奈良　古賀しぐれ
大空をひよいと覗いて河骨黄　同　同
短夜や指が覚えてゐるピアノ　東京　橋本くに彦
幸せな泡をひとつ山椒魚　同　同
はためきし油断に破れ苗蕉の葉
寄る辺なき身を涼風に凭せ掛け
流れにも戻る定位置あめんぼう
早苗まだ眉のごとくにそよぎをり
睡蓮の水の中からオラトリオ
滔滔と水切切とほととぎす
一瀑の落つ万緑を絞り込み
水を生み水を落して山涼し
耳の底耳の底へと滝落つる
眩しさのウェストライン今年竹
客去れば水量減らす造り滝
青空に暑さ張り付く日なりけり

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（十月号より）

佳乃・純也・昭代
一歩・仁義・くに彦
しげ人・比奈夫・暮潮
雅・廣太郎

醤も亦龍野の誇風薫る　神戸　**千原叡子**

小京都と呼ばれる龍野は兵庫南西の街。市内を揖保川が流れ、古い武家屋敷を中心とする美しい町並みが残り、城下町の風情が漂う。鶏籠山に霞城と呼ばれる龍野城を望み、「赤とんぼ」の作者、三木露風の生誕地としても知られる。誇れるものは多い街なのだがその中でも醤油の名産地としても有名だ。

この句は龍野への挨拶句であり、同時にホトトギス同人の故浅井青陽子氏への挨拶句ともとれる。氏は先日百一歳で亡くなられた。青陽子氏もまた龍野の誇りのひとつであったと思う。

季題「風薫る」が風光明媚な龍野にふさわしく、この句をいっそう印象的にしている。（佳乃）

平成二十三年五月十三日に満百一才でお亡くなりになったホトトギス同人浅井青陽子様への追悼句であろう。日本、いや世界一の薄口醤油の会社の経営者として、亡くなられるまで現役を貫き通された故人への、最高の「送る言葉」として、この句は永遠に記憶される事だろう。（廣太郎）

草引いて今日お別れにならうとは　たつの　**三木その女**

浅井青陽子様への追弔句であろう。作者は身近にお仕えしておられたから、百歳を超えられて、なお矍鑠とされていたのに、急に亡くなられたことが、納得できないようなお気持なのであろう。「草引いて」というのだから、密葬の準備でもされているのであろうか。実際に葬いの準備をしていながら、心は全くそんなことを肯っていないというような心境が、冷静に描けている。（純也）

追悼句が続くが、作者は、浅井青陽子様の秘書をされておられた。仕事の上でも、そして俳句の上でも、文字通り公私ともに深く繋がっておられたのである。最後迄青陽子様はお元気でいらっしゃったそうだ。そうなると余計に別れの悲しみは強いだろう。淡々と悲しみが伝わってくる。（廣太郎）

（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

沢子選

ふるさとのしだいに恋し花みかん　龍ケ崎　今橋眞理子
短夜の月を仰ぎて離れ住む　東京　同　稲畑廣太郎
川幅が卯浪を呼んでをりにけり　同
渦巻いて卯浪ぶつかり合ふところ　京都　安原　葉
雲とばす東京タワー青嵐　同
節電に協力せんとクールビズ　福山　竹下陶子
芝火燃ゆ米寿のいのち美しく　同
思羽の彩に従ふをしの妻　仙台　赤川誓城
梅雨入りと聞かねば知らぬほどの晴　同
松蟬の声に瓦礫の村遠し　小金井　武井良平
岳麓の果てなき起伏青嵐　同
青嵐一日満喫山の荘　東京　今井千鶴子
生きてゐて祇園祭の空青き　同
真昼間の鉾町上ル下ルかな　大阪　蔦　三郎
吾に来る落花と川へ飛ぶ落花　同
落花飛ぶ飛ぶ飛ぶ吹かれ吹かれては　櫃原　稲岡　長
花少しくすみたれども気品増え　同
みなぎりて若木の桜とは真白　神戸　後藤比奈夫
黴の書に満更ならぬわが一句　同
子を背に乗せたる父の平泳　熱海　嶋田一歩
若竹に通ひ路改めて出来し　同
竹林に入り高くとび梅雨の蝶　同　嶋田摩耶子
長旅を終へ昨日今日干蒲団　同
炎天を喜ぶ洗濯もの干して　神戸　長山あや
話したくない日の日傘深くさす　同
月光とふはふは遊ぶ合歓の花　吹田　宮崎　正
渓川のさ走れる音木下闇　同
ほととぎす森の深さに啼き継ぎぬ　東京　内藤呈念
蜘蛛の囲や待つことつまり生くること　同
蜘蛛の囲をあぶり出したる小糠雨　箕面　井上浩一郎
短夜を来たる列車のひとつ着く　同
むらさきの山の風湧く花樗　熊本　岩岡中正
仮の世の仮の傘さし河鹿聞く　同
ででむしの身の内透けて見ゆるかな　神戸　三村純也
籐椅子のきしめば過去のよみがへる　同
刀自の間はなほ奥まりて夏座敷

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

ふるさとのしだいに恋し花みかん　龍ケ崎　今橋眞理子

頻りに古里が懐かしい作者の心の推移。

渦巻いて卯浪ぶつかり合ふところ　東京　稲畑廣太郎

荒々しい卯浪。

雲とばす東京タワー青嵐　京都　安原葉

まるで東京タワーが雲を飛ばしているように見える青嵐

芝火燃ゆ米寿のいのち美しく　福山　竹下陶子

芝火の燃えるが如きいのち。

梅雨入りと聞かねば知らぬほどの晴　仙台　赤川誓城

晴れていて梅雨入りと聞く。

岳麓の果てなき起伏青嵐　小金井　武井良平

富士の裾野を吹き渡る青嵐。

生きてゐて祇園祭の空青き　東京　今井千鶴子

祇園祭の晴れた青空を見ての感慨。

落花飛ぶ飛ぶ飛ぶ吹かれ吹かれては　大阪　蔦三郎

しきりに吹かれ飛ぶ落花の風情。

PDF= 俳誌の salon